

『能・ロミオとジュリエット』を見る

Seeing Noh: Romeo and Juliet

三上 紀史

MIKAMI Tadashi

12月8日に国立能楽堂で上演された『能ロミオとジュリエット』は、作劇法の面から言えば、同じ作者の上田（宗片）邦義氏が1983年に発表し、能シェークスピア研究会によって演じられた『能 ハムレット・五場』（英語版）に似ている。五幕ある原作の重要な場面を抽出しながら、劇的展開にそって場面を積み上げていく方法をとっている点が似ているのである。

バロック風のシェークスピア劇と、省略による緊密な構成をもつ能とを融合させるのはむつかしい。上田（宗片）氏が『能 ハムレット・五場』の後に発表した『能 ハムレット・二場』（英語版）や『能 オセロー』（英語版）は、シェークスピア劇の一部を取り出し、夢幻能の形式にして、より能に近づけた。これらは能の特徴を上手く捉えて能らしくなったが、シェークスピアの劇的展開は犠牲にされた。シェークスピアのドラマとしての面白さを生かし、能の特徴も失わない完璧な融合劇は、おそらく存在しないにちがいない。

今回の公演は、シェークスピア劇と能を組み合わせることによって、それぞれの美点を消すというネガティブな作用を逆手にとって、ポジティブな面白さを創り出すことに成功している。つまり、バロック風の劇的要素を能の様式の中にはめ込むことによって、洗練された融合劇にしているのである。シェークスピアと能の、それぞれの特徴をともに生かした融合劇を作るとするならば、今回のような形をとることになるであろう。今回の上演には、新奇さゆえに新鮮な印象を与える演出がたくさんあった。

原作と大きく違うのは、僧ロレンスの扱いである。原作では、ロレンスは知恵と優しさ
と威厳をそなえた高僧のイメージが強い。『能 ロミオとジュリエット』では、ロレンスはアイとして軽く、かつ重要な役で登場し、劇の進行のつなぎと語り手の役を果たす。この役柄は成功している。この役に原作の僧ロレンスのような性格を与えると、登場人物のバランスが悪くなるにちがいない。

場面として優れているのは、最初の舞踏会の場面である。〈楽〉であって〈楽〉でないような囃子の演奏とジュリエットの舞、そして囃子の演奏の途中から謡いはじめる地謡とのアンサンブルは絶妙で新鮮な印象を受けた。

ジュリエットが薬を飲んで仮死する場面で、一畳台の覆いが取り去られて白い棺に変貌したのは視覚的に鮮やかであった。さらにその台にジュリエットが横たわった姿は、強烈な視覚像を創り出した。女性が寝ると言う演出は能ではめずらしい。

最後がどのように締めくくられるのかは興味のあるところだったが、ロミオとジュリエットの霊が相舞を舞うことによって、両家の和解の象徴を暗示したところは、能仕様の終わり方として成功している。

プロのベテランの能楽師が演じたこともあって、洗練された面白い融合劇となった。

(大東文化大学名誉教授)